



東北大学

東北大学

TOHOKU UNIVERSITY

TOHOKU UNIVERSITY

震災からの復興を原点に 「心豊かな社会」の実現を目指す



「社会とともにある大学」
として多彩な研究を推進

独自の取り組みで持続可能な社会を目指す東北大学。その原点となったのは、2011年に東北地方を襲った東日本大震災だった。

震災発生直後から全学の構成員が各自の専門性を生かして緊急医療支援や現地調査への協力と情報発信、さらに災害対応ロボットの開発と適用などの支援活動を行い、1ヵ月後には「災害復興新生研究機構」を設置。「安心・安全で持続可能な社会の構築」を目指し、8つの重点プロジェクトを推進してきた。そのうちの1つである「災害科学国際研究推進プロジェクト」は、2015年3月の国連世界防災会議で制定された国際アジェンダ「仙台防災枠組」の推進に大きく貢献した。また、「地域医療再構築プロジェクト」では、被災地の医療従事者の技術向上の機会を創出。食事や運動などの生活習慣と病気の発症との関連性を探る大規模コホート調査に基づく複合バイオバンクの構築も行い、東北を拠点とした未来型医

療の実現に取り組んでいる。

こうした被災経験と復興プロジェクトを通じて生まれた「社会とともにある大学」というアイデンティティを基盤に、2015年には社会課題を解決する全学横断型プロジェクト「社会にインパクトある研究」を開始した。「30年後の社会がどうあるべきか」という理念のもと、東北大学の伝統や総合的な研究開発の強みを活用しプロ

ジェクトを展開。研究目標の達成だけでなく、その先の「誰もが安心して過ごせる心豊かな社会」を目指すことが、このプロジェクトの最大の特徴である。

そして、2017年に世界最高水準の教育研究活動の展開が見込まれる国立大学法人であることとを文部科学省が認める「指定国立大学法人」に日本で初めて指定された。また、2018年に「東北大学ビジョン2030」を発表。

新たな社会価値を創造し、世界の

変革を率いることを表明した。震災直後から継続してきた「東北大学復興アクション」と「社会にインパクトある研究」はSDGsの17の目標と密接に結び付いたテーマであり、これらを両輪に「東北大学版SDGs活動」を新たな社会連携の取り組みとして設定し、全学が一体となって活動している。

《 持続可能な社会の実現に向けたあゆみ 》

3月 東日本大震災発生

4月 > 災害復興新生研究機構設置<復興アクション開始>

東北復興・日本再生の先導者として8つのプロジェクトを推進

- | | | |
|-----------------|-------------------|---------------|
| 1. 災害科学国際研究推進PJ | 4. 情報通信再構築PJ | 7. 地域産業復興支援PJ |
| 2. 地域医療再構築PJ | 5. 東北マリンサイエンスPJ | 8. 復興産学連携推進PJ |
| 3. 環境エネルギーPJ | 6. 事故炉廃止措置・環境修復PJ | |

7月 > 社会にインパクトある研究 開始

東北大学の研究の伝統・強みを活かし、人類が持続可能な世界を構築するために必要となる課題解決に挑むプロジェクトを発足。7テーマ・30プロジェクトを推進している

世界の動き

3月> 仙台防災枠組2015-2030採択

9月> 持続可能な開発目標(SDGs)採択

12月> COP21 「パリ協定」採択

2030年までの国際的な防災指針を示す仙台防災枠組、国連サミットで採択されたSDGs、2020年以降の気候変動問題に関する国際的な枠組みであるパリ協定。地球環境に対する国際社会の三大アジェンダが2015年に示された。

[テーマ]

- A. 持続可能環境の実現
- B. 健康長寿社会の実現
- C. 安全安心の実現
- D. 世界から敬愛される国づくり
- E. しなやかで心豊かな未来の創造
- F. 生命と宇宙が拓く交感する未来へ
- G. 社会の枢要に資する大学

6月 > 「指定国立大学法人」に指定

「社会との連携～社会創造・震災復興」を重要課題の1つに設定。復興アクションおよび社会にインパクトある研究を両軸とする「東北大学版SDGs活動」を新たな社会連携の取り組みとして位置づけ、世界最高水準の教育研究活動を展開

3月 > 新しい国際認証制度「防災ISO」を提唱

防災に関する日本発の国際的なルールを策定、世界の防災力強化に結び付けるべく、国際標準化機構への申請を目指す

Message

東北大学は1907年の建学以来、研究第一の伝統、門戸開放の理念、実学尊重の精神を基に数多くの教育研究成果を挙げてきました。これらの伝統、理念等を積極的に踏襲し、さらに東日本大震災の被災経験やその後の復興プロジェクトによって醸成された「社会とともにある大学」という確固たるアイデンティティを堅持しながら、社会課題を解決するための独創的な研究を推進し、持続可能な人類社会の実現に貢献していきます。

東北大学理事・副学長(社会連携・震災復興推進担当)

原 信義



University Information

東北大学 TOHOKU UNIVERSITY

片平キャンパス：〒980-8577 宮城県仙台市青葉区片平二丁目1-1 URL: https://www.tohoku.ac.jp/

人材育成取り組み紹介

▷ SDGs達成に向けた高度の知を創出し、グローバル人材を育成する

[東北大学大学院国際文化研究科 劉庭秀 教授]

国際文化研究科では、MS&ADインシュアランスグループホールディングス株式会社とMS&ADインターリスク総研株式会社の寄附を受け、寄附講義「プロジェクトリスクマネジメントII」を開講。社会におけるさまざまなリスクとその対策、持続可能な開発をキーワードに、リスクマネジメント理論を中心に専門家による高度知識を提供する。また、民間企業や国際機関におけるSDGs活動の事例を紹介し、国際課題への意識も高める。



▷ 世界各国から多様な文化や経験を持つ学生が集い、人類の共通課題に立ち向かう能力を養う

[東北大学大学院国際文化研究科 グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム]

国際文化研究科が2019年度より開講している「グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム(G2SD)」分野横断的な学際教育プログラムで、「グローバルガバナンス」「持続可能な開発」という国際社会が直面している課題解決に取り組む。プログラムは高い専門性と豊富な実務経験を持つ教員によってすべて英語で実施され、批判的な理論の検証と問題解決型の研究によって広い視野で国内外における諸問題の解決能力を養うことを目指す。



▷ 行動・実践をテーマに、協働して課題解決に挑む人材を育てる

[東北大学公共政策大学院 深見正仁 教授ほか]

公共政策大学院では、1年次必修の「公共政策ワークショップ」で現実の政策課題を調査し、解決策を立案するグループ学習を実施している。2019年度に「SDGsの実現を目指した協働プロジェクトを企画する」をテーマとして活動を行ったグループは、「誰一人取り残さない包摂的な社会」の実現を目指して、フードバンク事業者や東北地方ESD活動支援センターとの協働活動を行い、政策提言をまとめた。



- 1. 東北大学 (31)
- 2. 京都大学 (1)
- 3. 東京大学 (2)
- 3. 東京工業大学 (71)

※()内は昨年順位

高い教育力が評価され、「THE世界大学ランキング日本版2020」で総合1位を獲得

こうした社会貢献の研究と並行して力を入れているのが、持続可能な社会を生き抜く人材の育成である。2020年3月に発表されたイギリスの高等教育誌『Times Higher Education (THE)』による「世界大学ランキング日本版2020」において、東北大学は総合1位に選出された。このランキングは大学の教育力に着目し、「教育リソース」「教育充実度」「教育成果」「国際性」の4分野の指標で構成される。東北大学は企業人事と研究者の評価に基づく「教育成果」や、教員の論文数・学生の学力などに基づく「教育リソース」の分野で高評価を得た。

高度な研究成果を社会課題解決や人材育成に活用し、未来社会の変革・イノベーションに寄与する

社会にインパクトある研究 プロジェクト例

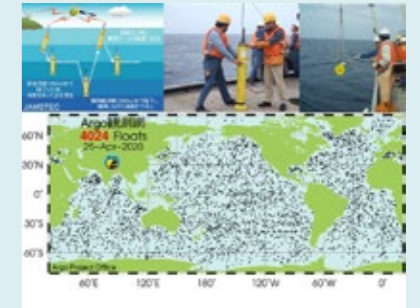
A1 地球温暖化

地球温暖化の緩和と適応への貢献

▷ 地球を俯瞰し、社会的貢献へつなげる

[プロジェクトリーダー:早坂 忠裕 教授(東北大学大学院理学研究科)]

東北大学気候研究推進センターを中心に、学内の研究科・研究所や国内・海外の大学・研究機関と連携してプロジェクトを推進。世界の海洋変動をリアルタイムで観測する全球自動海洋観測網Argo(アルゴ)や研究船による海水温・塩分観測データ、南極域・北極域をはじめとする広域の温室効果ガス観測データなど、精度の高いデータを活用。地球温暖化の緩和策と適応策の構築、ひいてはSDGsへの貢献を目指す。



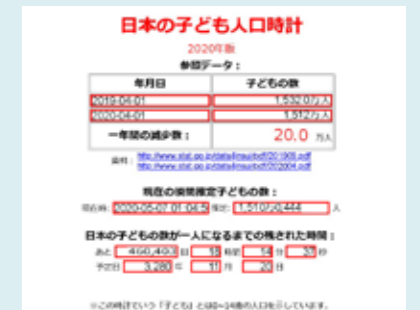
E2 長寿社会

少子高齢社会から心豊かな長寿社会へ

▷ 世界をリードする研究を国際社会へ発信

[プロジェクトリーダー:吉田 浩 教授(東北大学大学院経済学研究科)]

少子高齢社会における経済や公共政策の諸問題、そして高齢を支える若者世代が直面する問題に着目して研究を行い、経済分野の視点で社会分析と解決策を提示する。日本の子ども人口の減少を数字で示した「日本の子ども人口時計」や、子育てモトリアム制度による働き方のシミュレーション結果など、さまざまな研究の「見える化」を通じて、不安のない長寿社会へ転換するための政策を国際社会へ発信する。



B3 認知症ゼロ

スマート・エイジング:生涯健康で認知症ゼロの社会を目指して

▷ 超高齢社会において健康寿命の伸長を目指す

[プロジェクトリーダー:瀧 靖之 教授(東北大学スマート・エイジング学際重点研究センター)]

小児から高齢者までの幅広い年齢層から収集した生活習慣、認知力、遺伝子情報を含む脳画像データベースや、同一人物の長期的な脳画像の追跡研究など、大規模かつ世界最先端の研究成果を用いて、認知症の早期予防や低リスク化を目指す。また、認知症予防を通じた医療費削減の実現や、運動、趣味活動、さらには機能性食品の開発など健康増進ビジネスの発展においても、社会に研究成果の還元を図る。



伝統と最先端の研究を結集し社会課題の解決に挑む

持続可能で心豊かな社会の創造を目指しスタートした「社会にインパクトある研究」。2011年に発生した東日本大震災の1カ月後に設置された「災害復興・新生研究機構」での活動を基に、持続可能性を資源や環境の側面から捉えた課題を設定。ASGの7つのテーマ(詳細はP63「持続可能な社会の実現に向けたあゆみ」を参照)を掲げ、それぞれのテーマに分類される社会課題の解決に向け、合計30のプロジェクトを推進している。部局の枠を超えて研究力を結集したこのプロジェクトは、SDGsの目標やターゲットとも合致するものが多く、「東北大学版SDGs活動」としての展開も行っている。また、「C3 感染症超克」プロジェクト「プロジェクトリーダー:押谷仁教授(東北大学医学系研究科)」では、これまでの研究成果を踏まえ新型コロナウイルス感染症(COVID-19)対策の支援を行うとともに、本感染症に関する研究開発を推進している。